

フリーソフトウェアが学术论文の読者像をあぶり出す

轟 眞市

物質・材料研究機構 光材料センター*

Shin-ichi TODOROKI

今年1月、ネット検索をしているうちに妙なページにたどり着いた。筆者の論文 [1] の書誌情報が表示されているその脇に、図1に示す「Readership Statistics(読者層統計)」と題した欄があるのだ。そこに記されている「Mendeley」とは、フリーで使える文献管理ソフトウェアの名前であり、これを使って筆者の論文を手元に置いている人が4人いることが読み取れる。たった4人の読者層ではあるが、彼らの専門分野や職種、国が見えるのは、愉快的気分だ。論文の反響を見積もる尺度といえば「引用数」が真っ先に挙げられるが、それとは別の尺度に成長するような予感を抱いた。

このサービスが立ち上がったのは2008年のことで、既に10万人を越えるユーザーが居らしい。開発元のブログには、2009年に刊行された論文に対する読者層ランキングが掲載されている¹。

文献管理ソフトウェアの進化

学术论文の執筆の際に避けて通れないのは、引用文献リストの作成であり、その手間を省くためのソフトウェアが昔から使われ続けてきた²。現在、一番有名な製品はEndNoteだと思われる。筆者はBIBTEXを20年近く使っている。この種のソフトウェアで行う仕事とは、パーソナルなデータベースを構築することであるから、ひとたびあるソフトウェアを使い始めると、別なものに乗り換えるには相当のエネルギーが要る。データベースをイチから構築し直すに足るご利益が得られなければ意味が無い。

* 〒 305-0044 茨城県つくば市並木 1-1
fax 029-854-9060

¹ <http://www.mendeley.com/blog/2010/01/>

² Wikipedia 英語版には、さまざまな reference management software を比較している ページがある。

Readership Statistics

4 Readers on Mendeley

by Discipline

75% Computer and Information Science

25% Biological Sciences

by Academic Status

75% Ph.D. Student

25% Student (Postgraduate)

by Country

25% United Kingdom

25% Germany

図1: 筆者の論文 [1] を Mendeley に登録してくれた読者の構成。

筆者も乗り換える気持ちは無いのだが、それでも Mendeley に注目する理由は次の3点である。

1. 手元の論文 PDF ファイルやアクセスしたオンラインジャーナルのページをマウスで操作するだけで、簡単にリンク付き論文リストを作成でき、それを同僚と共有したり、Web 公開できる点。
2. 論文リストに関連付けられた PDF ファイルは、複数の PC 間で自動的に同期できる点。
3. ユーザが作成した論文リストは集計され、その統計情報が公開される点。

思わず遊んでみたくなる手軽さ

<http://www.mendeley.com/> を開いて「Get Mendeley」をクリックし、登録に必要な情報を入力してソフトウェアをダウンロードする。インストールを済ませれば、直感的な操作でいとも簡単にリンク付き

論文リストが出来上がる。書誌情報をイチから打ち直す必要は無い。練習がてら、以前の連載記事 [2] で掲げた図(シリカガラス製光ファイバの損失低減の歴史)を作るのに参照した論文の一覧を作って Web 公開した³。それが何の役にたつのか、と問われれば、後輩達へのささやかなプレゼントである、と答えよう。これから光ファイバのことを学ぶ人たちが、そのページを検索エンジンで見つけてくれることもあるはずだ。

仮想文献庫を実現する同期機能

しかしそれ以上に魅力的なのは、一度論文 PDF ファイルを登録したら、研究室からでも自宅からでも読み出せる様になっていることである。以前の連載記事 [3] で指摘した、電子ファイルに対する「ポケットひとつの原則⁴」を自動的に実現してくれる。いわば、インターネット上に個人の文献キャビネットを持つようなものだが、PC がネットに繋がっていない状態でも最低限の機能は使えるようになっている。

適度に垣間見えるユーザー層

Mendeley が独自の存在になっているのは、冒頭でも紹介した統計情報であろう。Mendeley へのユーザー登録を済ませると、いろいろな統計情報を見ることができる。今どんな論文が良く読まれているか、誰の仕事に注目が集まっているか、どんな雑誌が読まれているか、がランキングで表示される。ただしこの情報は、ユーザー層の成熟に依存していることに注意しなければならない。ユーザー数の分野別比較を見ると、生物科学や情報科学が抜きん出ており、材料科学は下から数えた方が早い。職位で見れば、学生やポスドクが大半であるように見受けられる。今後のユーザー層の拡大が価値向上の鍵となるだろう。

³Milestones after Dr. Charles Kao's prediction, <http://www.mendeley.com/research-papers/collections/1512951/> オンラインジャーナルへのリンクを表示させるためには、Mendeley へのユーザー登録が必要であることに注意。

⁴野口由紀雄氏が著書『『超』整理法』(1993年)で提唱した書類管理の原則。個人で所有する書類は、その検索手段を整備した上で1箇所にとどめるべき、とした。

省力化は必ずしも善ならず

以前、大御所の研究者が文献管理ソフトウェアに関して発したコメントが印象に残っている。便利になると、ひとつひとつの論文に対する執着が薄れてしまう。彼は今でも Excel で手入力して管理しているという。それだけ手と頭を動かして接しているからこそ、他人の仕事に対する印象、評価、敬意が記憶に残るのだろう。筆者が BIBTEX を使い続けているのは、まさにこの理由によるのだが、その一方で、新しい技術に対するワクワク感も味わってきたいのである。

[参考文献]

- [1] S. Todoroki, T. Konishi and S. Inoue: "Blog-based research notebook: personal informatics workbench for high-throughput experimentation", Appl. Surface Sci., **252**, 7, pp. 2640–2645 (2006).
- [2] 轟 眞市: "高校生に「光ファイバー通信の父」がノーベル賞を貰った理由を説明するには", マテリアルインテグレーション, **22**, 12, pp. 69–70 (2009).
- [3] 轟 眞市: "研究生のためのインフォーマティクス (1) ポケットひとつの原則 ファイルは手ぶらで運ぶもの", マテリアルインテグレーション, **21**, 10, pp. 68–69 (2008).